マレビトの塔

Keywords
マレビト　山谷　線路　衝突　表出

K09049　島崎　萌子

1.はじめに

「マレビト」とは異界からやってきた人の事を指す。
古来より日本人はマレビトを丁重に敬い
新しい文化を取り入れるとによって
自国の文化の根幹を形成してきた。

マレビト
稀人
客人

図1　マレビトの具体例：Bruno Taut

毎年日本には他国から大勢の旅人がやってくる。他国からの旅人が街を歩いている光景は特に新鮮さを感じさせる事もなく、私たちの日常となった。交通技術や通信技術の発達により、世界の距離は縮まり続けている。その恩恵にあやかっている一方、私はグローバリゼーションの台頭によって進む世界の均質化に危機感を覚える。人々がそれぞれに根付いた文化の特異性に気づき、互いに認め合い、それを表現していける世界を実現したい。そこで進み続けるグローバリゼーショを逆手に取ってみる。他国からの旅人は現代の「マレビト」になりうる存在であると仮定する。日常の光景となった他国からの旅人を「マレビト」として捉えなおす事で、新たな世界の捉え方が見出される。メディアなどにより受動的に情報を得るのではなく、一人一人の小さな声を拾い集めることが、新しい個人と世界との対峙ではないだろうか。異文化に触れる事は自身を相対化し特質の発見や視野を広げることに繋がる。均質化が進む現代において「差異」を見出していくことは非常に重要であり、「マレビト」は差異に気づくきっかけを与えてくれる。「マレビト」との様々な出会いが発見を生み、それが全世界に発信されていくような場を提案する。

2.研究背景

私は国内外への旅行や他国の学生とのワークショップを通して自分が相対化されていく事に感動した。それが本設計の始まりである。グローバリゼーションに覆い尽くされた現代。巨大な経済の動きの中で日本企業の海外流失は止まらず利益至上主義により国は意味を持たなくなりつつある。個人レベルでは国はもとより地域への帰属意識も希薄であり、あらゆるモノが均質化の一途を辿っている。世界の均質化に対抗するべく「マレビト」として他国からの旅人を受け入れ「マレビト」との交流と発信の場が必要である。

3.研究目的

情報通信技術の発達により、私たちは「いつでも、どこでも、誰でも」世界中の情報を得られるようになった。さらにFacebookなどのSNSの浸透により、インターネット上のコミュニケーションが可能になった。人々が仮想空間で交流しだした現代、建築という実空間だからこそ実現する交流と情報発信の場を考える。

4.敷地

図2　敷地

敷地は東京メトロ日比谷線南千住駅からドヤ街と呼ばれる山谷へ向かう唯一の道である歩道橋を拡張した場所である。山谷地区は江戸時代から日光街道・奥州街道の最初の宿場町であった千住の南端として、多くの木賃宿や隣町の花街「吉原」で栄えた。戦後、山谷はドヤ街として多くの日雇い労働者の宿となったが、日雇いの仕事が激減したことにより、街の活気は失われていった。そんな山谷に新しい街の住人として2002年の日韓ワールドカップを機に外国人観光客が増加した。外国人観光客にとって破格の料金（ドミトリー：一泊1500円～）で宿泊できる事と浅草や秋葉原、上野へのアクセスの良さが魅力であった。山谷に外国人観光客が増加する一方、街の受け入れ態勢が整っているとは言い難い。高齢の路上生活者が増え、同時に街の活気も失われ商店街は空き店舗が40%にのぼるなど、この地域は様々な問題を抱えている。

5.プログラム

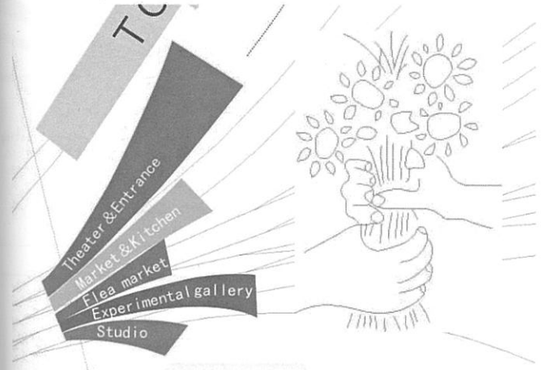


図3　プログラムの配置とコンセプト

複数の線路と隅田川駅により南千住駅周辺は南北に分断され、駅の北は表、駅の南にあたる山谷はその裏となっている。その南北をつなぐ歩道橋を拡張し、マレビトを山谷に受け入れ、歓迎する門としての建築を設計する。「マレビトの塔」が建つことにより、山谷は街の表へと変化していく。

この建築は敷地の特徴である線路より導き出された５つの軸から形成される。５つの軸はそれぞれマレビトとの交流を促すため、以下のプログラムを定めた。

1)様々な人を呼び込むエントランスと劇場
2)食による交流の場（食材＋調理＋食す）
3)世界各国のものが集まるフリーマーケット
4)実験的な作品が集まるスロープギャラリー
5)様々な刺激を受けて新しいものを生み出す工房

そしてこの5つの軸が交わる空間がマレビトとの交流の場となる。そこからは5つの軸で行われているアクティビティを一望することができる。

6.設計趣旨

この建築にマレビトたちは集まってくるがここは彼らの目的地ではない。どこか別の目的に向かう途中の止まり木のような建築である。

7.設計手法

複数の線路を結び目のように束ねたところに敷地はある。線路はこの場に収束し、またそれぞれ目的地へと発散していく。それはマレビトたちの動きと類似していると言える。線路から５つの軸を導き出し、それぞれのプログラムに適した形態を模索していく。その際、それぞれの建築から見える光景をスタディし、軸のヴォリュームが介入する場面を考える。手順は以下の通りである。（詳細は次頁ダイアグラム参照）

1)プログラムにふさわしいヴォリュームを与える
2)それぞれの空間で見せたい空間を切り取る
3)その空間で行われるアクティビティが現れるように形態を操作する
4)さらに建築内部のアクティビティが外部にもれだすようにファサードを操作する

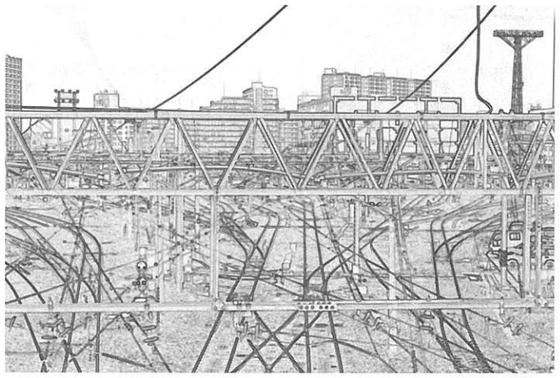


図4　歩道橋からみた線路

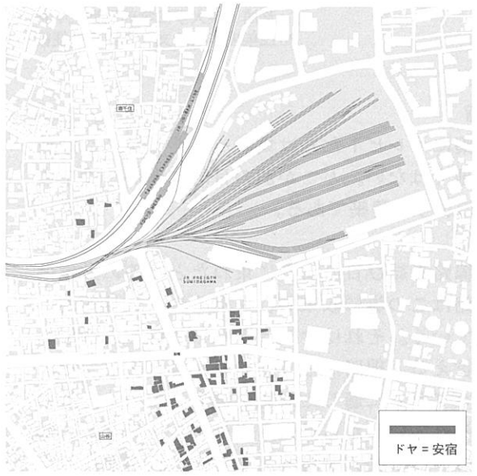
8.おわりに

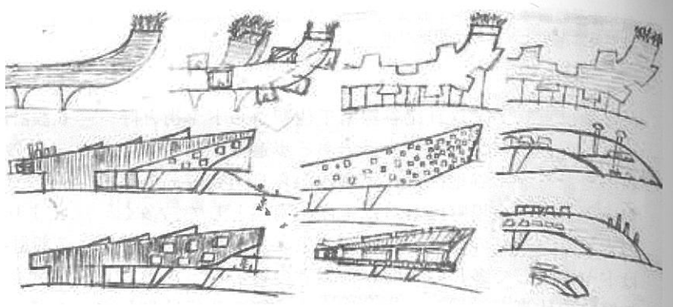
放射状に広がりどこまでも続く線路は
山谷に集まり、交わり、
また各々の目的地に向かって散っていく。
この実空間での一瞬の交わりが
自己を見つめ、多様な世界を認め合うきっかけとなる。

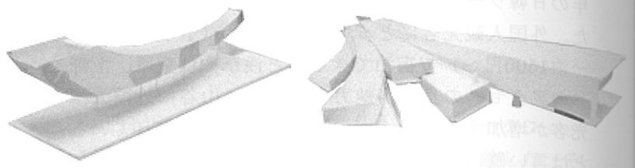
参考文献

1)「絶望の国の幸福な若者たち」 古市憲寿 講談社 2011
2)「脱 アイデンティティ」 上野千鶴子 勁草書房 2005
3)「深夜特急1~6」 澤木耕太郎 新潮文庫 1994
4)「Japan Creative」 ハースト婦人画報社 2012
5)「東京山谷地域における宿泊施設の変容」 地学雑誌
6) 東京DEEP案内 http://tokyodeep.info/ (2012.10.2閲覧)
7) Youtube http://www.youtube.com (2012.10.13閲覧)
8)「恋する惑星」 ウォン・カーウァイ 1994

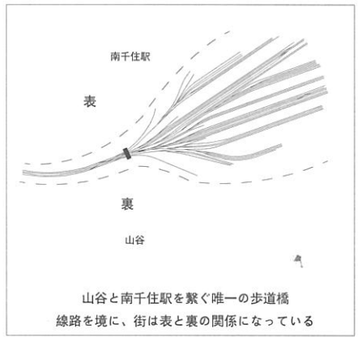
研究指導：伊藤洋子 教授
Moeko SHIMASAKI





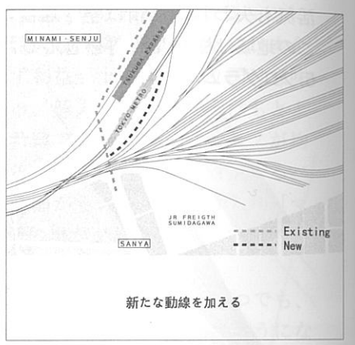


DIAGRAM

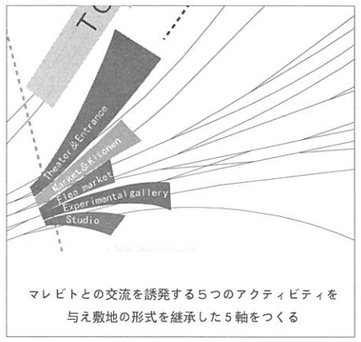


山谷と南千住駅を繋ぐ唯一の歩道橋
線路を境に、街は表と裏の関係になっている

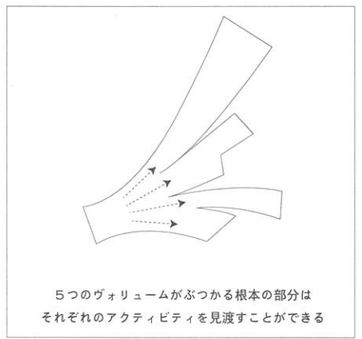
唯一の歩道橋を拡張した花束のような恰好の敷地
山谷へ向かうマレビトは必ずここを通る



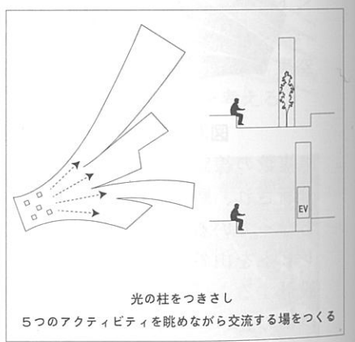
新たな動線を加える



マレビトとの交流を誘発する５つのアクティビティを
与え敷地の形式を継承した５軸をつくる

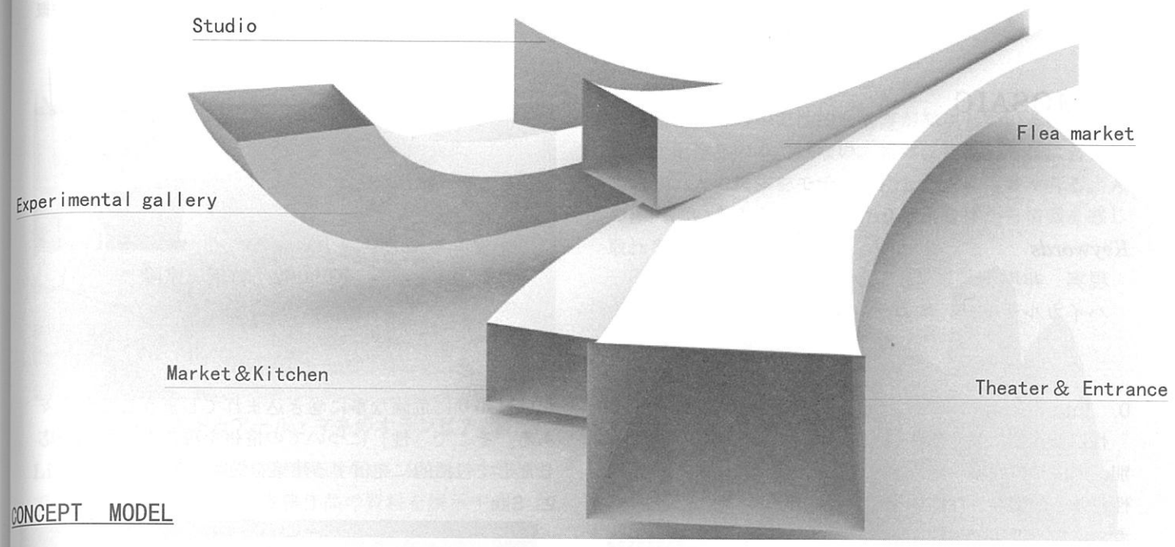


５つのヴォリュームがぶつかる根本の部分は
それぞれのアクティビティを見渡すことができる



光の柱をつきさし
５つのアクティビティを眺めながら交流する場をつくる

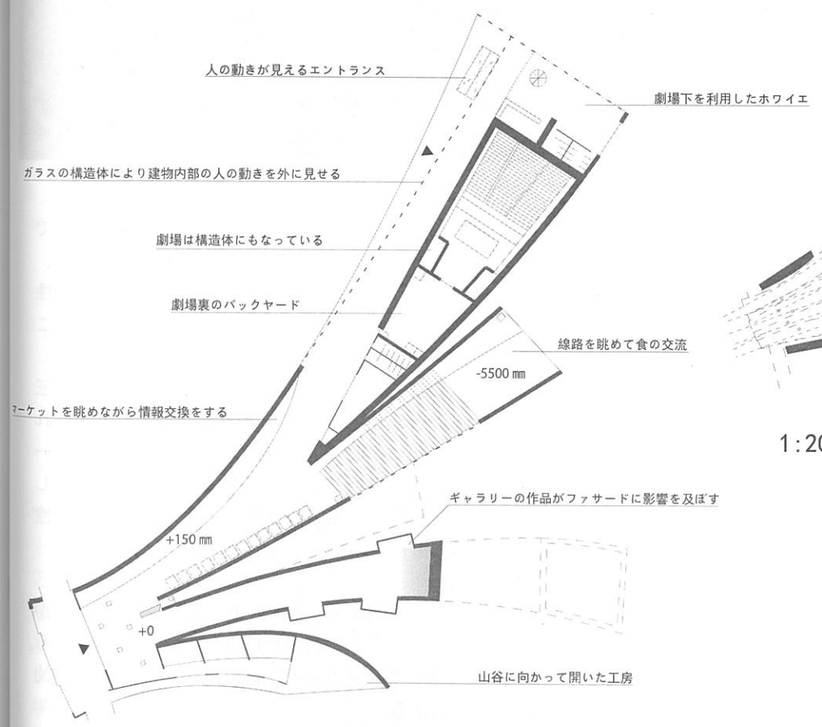
各アクティビティに適した
高さのヴォリュームを設定する
→
それぞれの軸から何が見えるのか
何を見せたいのか
→
軸から見える風景から断面の操作する
→
それぞれの軸で行われるアクティビティを
ファサードに表出させる

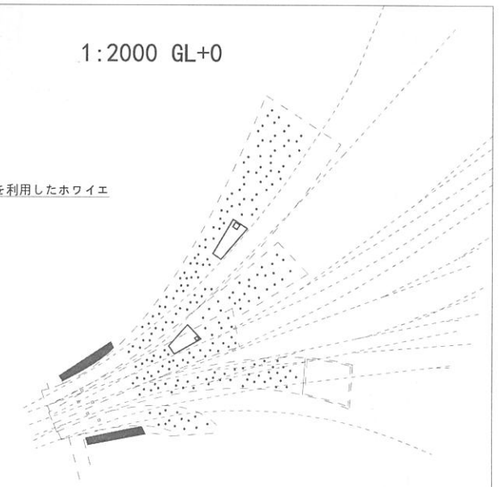


CONCEPT MODEL

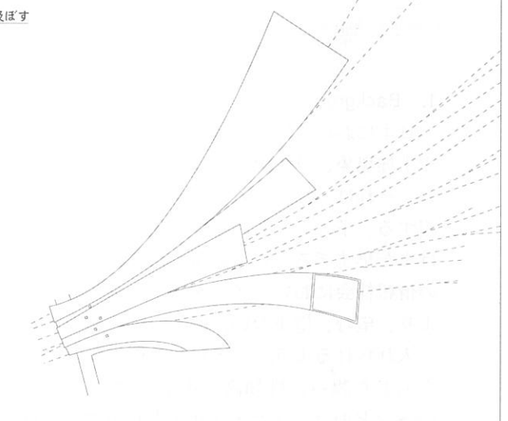
1:1000 GL+7500

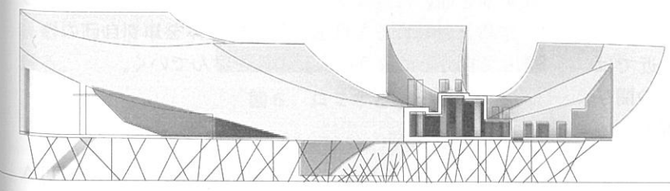
1:2000 GL+0





1:2000 Roof plan





1:1000 Section